

# 奴隷貿易からアメリカの音楽まで～の授業

2015/8

## 1 2枚の写真からわかるものは？

最初に、二枚の写真を見てください。

二枚の写真を見て、どんな人々か、知っていること、気がついたことをあげてみてください。二枚の写真とも、アメリカの人々を写した物です。



最初は、2枚目の方から、説明をしましょう。

2枚目の写真は、みなさんがご存知の通り、オバマ大統領。黒人で初めてアメリカの大統領になった人物ですね。そして、その家族。妻であるミシェル・オバマと二人の娘です。この時は、初めて大統領に選出されて、観客に手を振り、応えているところです。うれしそうです。

1枚目の写真、これはアメリカの黒人の人たちだ、ということはわかると思いますが、まず、何をしているところでしょうか。

うしろの畑は、綿花の畑です。手前に見える大きなかごを見るとわかります。収穫を終えた綿花が山積みになっています。泥だらけで、小さな子どもたちも、綿花を収穫するための袋を、肩から下げていることがわかるでしょうか。

アメリカ南部・ジョージア州の綿花畑で働く、奴隷の人々を写した古い写真です。

この二枚の写真を見て、みなさんはどんなことに気づきましたか？

中学三年生に、写真を見せて、この二枚の写真の違いは？と聞いた時、予想もつかない答えが出てきました。「一番の違いは、表情だ」と中学生が言ったのです。みなさんも、もしかすると、最初にその雰囲気の違いが気になったかもしれませんね。

しかし、写真を用意した私の方は、貧しさや衣服、そうしたものに気づいてもらおうと思っていました。私にとっては中学生の答えは意外でしたが、逆に、その答えが、「奴隷制度がどんなに人々を苦しめているのか、奴隷制度がどんなに罪なのか」を、私に教えてくれているように思えて、とても深い答えだと思いました。

そう言われてみると、オバマ大統領の家族のうれしそうな心からの笑顔、それに比べて奴隷として扱われてきた家族の暗く、苦しげな表情、その違いが、とても印象的です。

## 2 奴隷制度は、文明が発達したから、必要になった！？

アメリカの奴隷制度の始まりは、記録に残っているのが、1600年ごろ、それが最初だそうです。以来200年以上にわたって、法律で認められた制度として、アメリカ南部で、黒人が奴隷の身分で働かされていました。

みなさんは奴隷貿易という言葉を知っていますか。

聞いたことがある人もいるでしょう。アフリカの人々を連れ去り、奴隷として、アメリカ大陸で売り払う貿易のことです。

アメリカの奴隷制は200年ほどの歴史ですが、奴隷貿易はその前からですから、約300年にわたってアフリカの人々が1000万人以上、アメリカ大陸に売られてきました。

アフリカ大陸西部には、奴隷海岸と名前の付いた海岸もあったくらいです。今の地図には載っていませんが、今から30年前、高校で使われた地図には載っていました。(今はこういう呼び方は、もちろんしません)



拡大図



奴隷貿易の実際のようにすると、何と野蛮なことかと、誰でも驚きます。人間を動物のように売り買いし、それを300年も続けて大もうけするとは、どんなにひどいことかと思うでしょう。

しかし、二つのことをまず、知っておきましょう。

一つめは、こういうことです。

奴隷貿易を行なったのは、17世紀以降はイギリスが中心



ですが、それ以前から長い間、人類は、奴隷貿易のような人身売買を、さまざまな形で行なってきました。

たとえば、戦争の捕虜、戦に勝って支配した地域の住民たち、女性たち、子どもたち・・・そういう人々を売り買いする習慣は、地球上のいろいろな地域であったことでした。人身売買は、大昔のことではありません。

逆に、「身分の差は無く、人々がみな平等だ」と考えられるようになったのは、ごくごく最近の話なのです。

日本でも、兄弟が売り飛ばされて離れ離れになる「安寿と厨子王」の昔話は有名です。



また、特に戦国時代には、戦に負けた地域の人々をさらって売り飛ばすのは、当たり前のことでした。そのために戦に参加した人々も多かったのです。その文章や絵が残っています。日本にも、奴隷貿易(東南アジアに売られていった)や人身売買は存在したのです。

しかし、日本は戦国時代のあと、江戸時代の平和が続き、捕虜や奴隷に働かせるよりも、農業を発達させて富を得ようとなりました。

他の世界の地域でも、奴隷貿易が300年も続いた地域はありません。

では、なぜ、アメリカ大陸で、奴隷貿易が300年も続いたのでしょう。これが、二つめの大切なことです。

今の私たちからみると、奴隷貿易や奴隷制度が、とても野蛮で遅れていることのように思えますが、実は逆なのです。

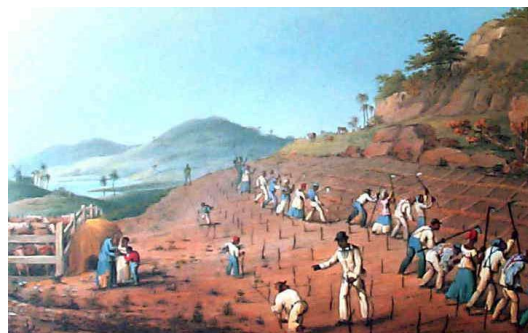
秀吉は九州の一揆を制圧したあと、年貢を厳しく取り立てた。  
払えない者は殺され、女子供は捕虜とされ、牛よりもはるかに安い値段で、売り飛ばされた。  
地獄のような様子だった。



この時代の世界の文明が発達するに従い、奴隷貿易がさかんに行われ、アフリカの人々が大量に連れ去られたのです。奴隷貿易でアフリカから連れ去られた人々は、どこで働いたのか、それを見るとよくわかります。

最初の頃の働いた場所は、金山や銀山、そして、さとうきび畑でした。南アメリカ大陸は、金や銀にあふれた大陸で、ヨーロッパ人たちは夢中になりました。ところが、鉱山で金や銀を掘るために働かされたインディオの人々の多くが、病気や重労働で亡くなってしまい、労働力不足に悩んでいました。

また、西インド諸島では、ヨーロッパの人々の甘いお菓子のため、畑を開墾し、サトウキビを育てていました。

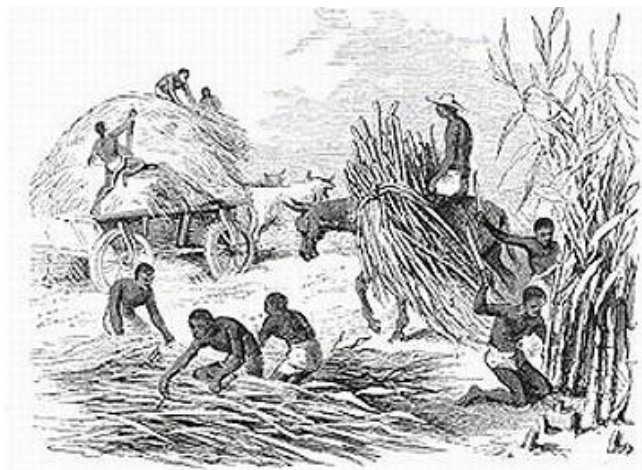


そこでの労働も大変な重労働です。

さとうきびはススキのようなイネ科の植物ですが、3m近くも伸び、収穫時期になると節ごとに甘い汁をたっぷり含んだ茎になります。その液を含んだずっしり重い茎、3mもの長さの茎、を刈り取り、それを工場まで運ぶには大変な労働力が必要です。また、この固い茎をしぼり、煮つめることも、大変な労働でした。



炎天下の熱帯で働くには、アフリカ大陸の熱帯で暮らす人々が、役に立つと思えたこともあり、アフリカの人々が奴隷として連れてこられました。



しかし、その後も奴隷貿易が終わらなかったのは、イギリスの産業革命の影響です。イギリスは、産業革命で、今まで手で織ることしかできないと思われていた木綿の布を、精密な機械を発明して、工場で大量生産でき

るようにしました。(これは、また、別の機会に勉強しましょう)

世界中に大量生産でできた綿布を、輸出していくのですが、イギリスの寒い地域では生産できない原料の綿花が、インドからの輸入だけでは足りなくなりました。

そして、19世紀頃からアメリカの南部でも綿花を生産するようになったのです。

綿花畑も、さとうきび畑と同じように、重労働を必要としました。

綿花の摘み取りと、綿花の種を取り除く作業です。

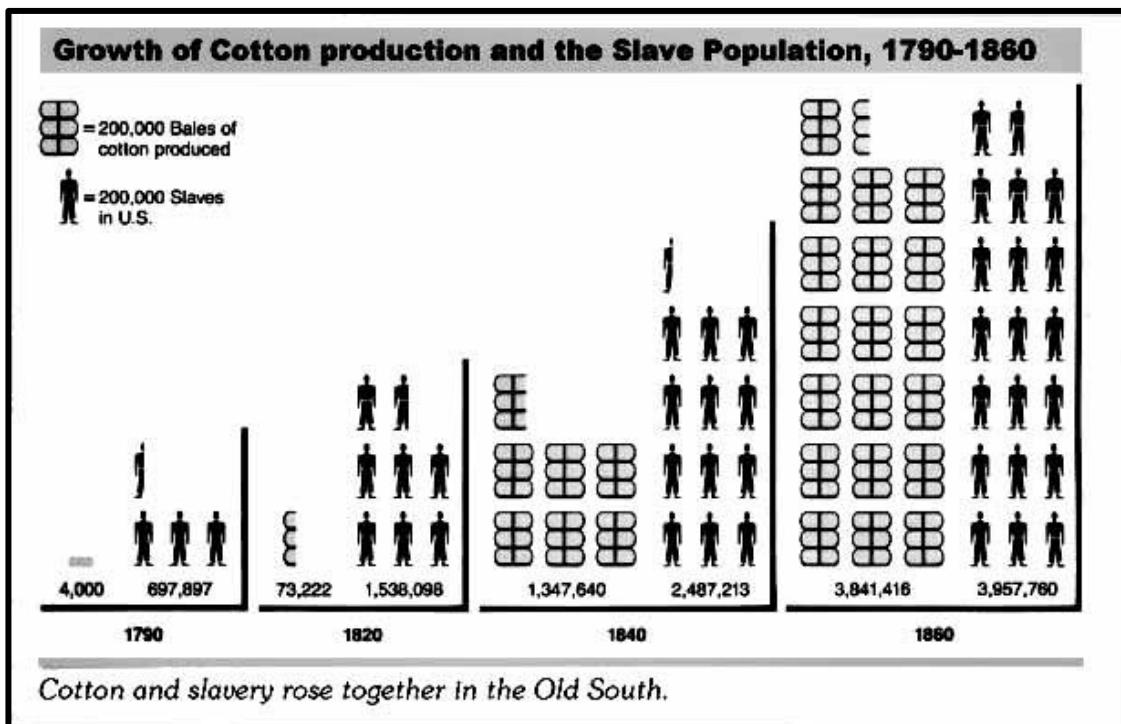


綿花は、茎の下の方から順に、実をはじかせ、白い綿毛を出していきます。綿花の中には、まわりの綿毛に包まれた種が10以上もあり、綿毛をむしり取らないと取り出せません。いっせいに綿花がはじければ、それから、毎日綿花を摘み取らなければならなかったのです。そのため、たくさんの労働力を必要としました。

ここにそのグラフがあります。



綿花の生産が増えれば増えるほど、南部で奴隷が増えていったことがグラフからよくわかります。



このように、イギリスの産業革命が発達し、各国がそれをまねて、工業化を進め



れば進めるほど、アメリカの綿花が必要になり、奴隷貿易がさかんになっていった・・・そうした関係があったのでした。

人々の生活が豊かになるその裏側で、奴隷貿易がさかんになっていったことを、覚えておいてほしいのです。

### 3 奴隷貿易とは、どういうもの？

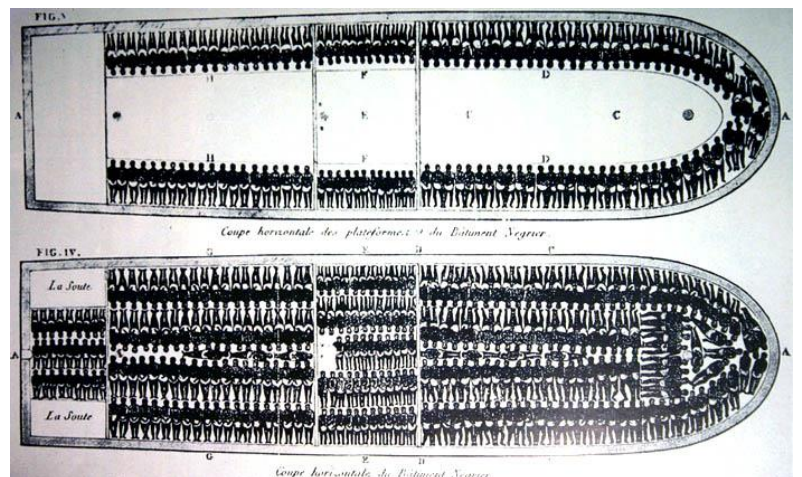
奴隷貿易がどういうものだったか、そのようすは、さまざまな本に描かれています。証言もありますが、映像化されたものでは、テレビドラマ「ルーツ」が有名です。

「ルーツ」はアメリカの黒人作家アレックスヘイリーが、自分の祖先はどこから来たか、アフリカのガンビア川のほとりまでたどり着いた長年の取材から描いた小説です。それがテレビドラマの原作となりました。

このドラマの中で、奴隷貿易の姿を、私たちの頭の中に、最も強く焼き付けるのは、何百人も詰め込まれた船の中での人々のようすと、アメリカに渡ってからムチで打たれる主人公：クンタキンテの姿です。

あまりに凄惨な、鎖でしばりつけられたアフリカの人々のようすに、胸が痛まない中学生は、一人もいません。

船酔いで吐き、それでも、棚の上に寝かされた姿勢のまま、食事もトイレもそのままに、行なわなくてはなりません。



同じアフリカ人と言っても、部族が違えば、言葉も違う。もちろん船で働く白人たちが何を話しているのか、どこへ連れて行こうとしているのか、全くわかりません。連れ去られている現実にはわかっていても、その先が予想できない不安と、家族や部族から引き離された悲しみ。



体は糞尿まみれで、栄養も十分とは言えない船内、この様子こそ人間扱いされていない苦痛であり、屈辱だったことでしょう。こうしたことを考えると、どれだけの肉体的・精神的な苦痛かと、見ている私たちも苦しくなります。

行きついた先のアメリカの農園では、まず奴隷としての名前を付けられます。自分の名前を奪われ、家畜のように扱われる日々……。

しかし、「ルーツ」の中では、最初の主人公：クンタキンテは、誇りを失わず、ご主人が自分につけた名前ではなく、アフリカの自分の名前を何度でも答え、何度でも逃走さえする。ムチ打たれても、最後には足の先を切られても、逃げようとする。……。

その姿に、中学生たちは、心底、敬意を抱きます。感動します。

「アフリカから捕らわれてきた祖先が、奴隷の境遇になっても、くじけず、誇り・プライドを高く持ち続けた」アレックスヘイリー自身が描かずにはいられなかった、黒人としての執念を感じました。

\*どうぞ、ドラマ「ルーツ」第1話～2話を見てください。

見る際には、第1話も大切です。平和なアフリカの家族の生活が描かれています。クンタキンテの幸せと誇りがうかがえます。

#### 4 奴隷制度は無くなっても、形と心はすぐには変えられない。

南北戦争で、北部が勝ち、北部にとっての労働力として黒人たちは重要だったために、リンカーン大統領は奴隷解放宣言を出します。

奴隷制度は廃止されました。



しかし、南部の綿花地帯は、黒人の労働力を必要としていました。法律は変わっても、生産のようすが変わらなければ、同じように働かなければならない黒人と雇い主の白人は、綿花地帯で暮らしを続けていきました。

奴隷制度は、無くなるまでの200年の間に、黒人たちに肌の色のコンプレックスを毎日植え付け、白人たちには、肌の色の優越感を毎日育てていました。ですから、奴隷制度が廃止されても、アメリカ南部では、変わりなく、極端な人種差別隔離政策がとられていったのです。



具体的には、血の一滴でも黒人の血が混じっていれば「黒人」として、一般公共施設の利用を禁止したり、結婚を禁じたりしていました。

そして、それらの差別を認める法律が、ついに無くなったのは、奴隷制度廃止から100年近くたって、1960年頃、20世紀になってのことでした。

1865年に、奴隷制度が廃止されたあとでも、どれほどの苦しみを、黒人の人々が味わってきたことでしょう。

その間にも、「人種差別は正しい考え方だ」とする白人の人々は、団体を作って、白人が優位であることを主張し、人種差別が原因の事件は、絶え間がないほど起きていました。奴隷制度の苦しみは、人々を対立、恐怖、不信、攻撃、報復・・・そうした感情に向かわせていったのです。

有名な団体で白人至上主義をとらえた団体にKKKという団体があります。この団体を中心に20世紀の初めごろには、黒人を攻撃したり、リンチにしたりする事件が多発しました。これらの人々は、白いシーツをかぶり、三角帽子をかぶって、黒人たちを襲いました。

今、これらの人々の行動は、アメリカの国民を二つに分けて対立させ、お互いの憎しみをあおる行動として、非難されています。先日も人種間の憎しみをあおろうとして、教会に乗り込み、黒人の人々を何人も射殺した犯人がいましたが、オバマ大統領をはじめとして、多くの政治家が、非難していました。

\*映画「プレイス・イン・ザ・ハート」は、今まで説明したアメリカ南部の雰囲気を十分に伝えている映画です。

南部で暮らす黒人たちが、どれだけ息をひそめ、白人の憎しみを買わないように行動していたか、白人たちは、身近な隣人のはずなのに、仮面をかぶることで自己の利益や自尊心を守ろうとして非人間的な行動までしてしまう、そういう時代のようによくわかります。



- 白人を事故で射殺した黒人少年が、裁判を待たずにリンチされて殺されてしまう。
- その白人の妻は、綿花栽培の経営をやくりりして、夫の借金を返し、抵当に入った家を守ろうとする。
- 綿花畑の収穫に、黒人たちを雇うのだが、その収穫の過酷なようす、手を血だらけし、期限までに収穫しようと徹夜で子どもたちも働く。
- 手助けするのが、流れ者の黒人なのだが、この人物が綿花買取の駆け引きを心得ていたため、近所の白人の反感を買って、KKKに襲われそうになる。



## 5 人々は、歌の中で、映画の中で、訴える。

20世紀の半ばごろ、黒人をリンチする人々がまだ、法的に許されていた時代のことを描いたジャズの有名な曲があります。

題名は「奇妙な果実：Strange Fruit」歌ったのは、ビリーホリデイです。歌詞を読んでみましょう。

.....黒人がリンチされ、木につるされた様子を読んだ詩

1939



南部の木々に 奇妙な果実が むごたらしくぶら下がっている  
その髪は血で染まり 根元にまで血潮はしたたり落ちている  
黒い遺体は 南部の微風にゆれそそぎ  
まるで ポプラの木から垂れ下がっている 奇妙な果実のようだ

美しい南部の田園風景の中に  
思いもかけず見られる 腫れあがった唇や苦痛にゆがんだ口  
そして甘く新鮮に漂うモクレンの香りも  
とつぜん肉が焦げた匂いとなる  
群がるカラスに その実をついばまれた果実に  
雨は降り注ぐ  
風になぶられ 太陽に腐り 遂に朽ち落ちる果実

ビリーホリデイが歌うと、しばらく聴衆は沈黙し、その後割れるような拍手にわいたと言われています。こうした歌を歌うことは当時危険もありましたが、ビリーホリデイは歌い続けました。しかし、最後はその差別に圧倒される形で麻薬とアルコールに毒されて亡くなります。

ベトナム戦争が激しくなる中、大ヒット曲が生まれました。ルイ・アームストロングの「この素晴らしき世界：What a wonderful world.」です。

この歌詞の中には、ベトナム戦争で多くの人が殺されている時代をバックに、差別と戦争に対する嘆きが、あるのだそうです。・・・平和な世界を夢見て歌った詩 1968

木々の緑  
赤く萌える薔薇 咲くのが見える  
そして私は一人つぶやく  
「なんて世界は素晴らしいのだ」

紺碧の空 純白な雲  
輝くように晴れた日も 神秘的な夜も  
そして私は一人つぶやく  
「なんて世界は素晴らしいのだ」

七色の虹が 空に美しく映える  
通りゆく人々の上にも輝く  
握手を交わす人々 「はじめまして」と挨拶している  
けど本当は「愛しています」と言っているのさ

赤ん坊の泣き声 彼らが育つのを見守ろう  
彼らは私の想像以上に 多くを学んでいくだろう  
そして私は一人つぶやく  
「なんて世界は素晴らしいのだ」  
私は一人つぶやく  
「なんて世界は素晴らしいのだ」





このころの映画で大ヒットしたミュージカル「ウエストサイド物語」も、人種差別を扱ったものです。

ロミオとジュリエットの悲恋を、ニューヨークのプエルトリコ系アメリカ人少年のギャング団と、ポーランド系アメリカ人少年のギャング団に置き換え、抗争する様子を描いたものですが、その憎しみ

の中で、犠牲者が出てしまいます。それも愛し合う相手を失う・・・という・・・

この映画の中で、ダンスシーンは、バレエの要素を入れながらも素晴らしい新しいダンスシーンを創造しています。

このダンスシーンを、さらに、マイケル

ジャクソンは、自分の曲のプロモーションビデオに取り入れ、こちらも素晴らしいダンスシーンを作り上げました。

いくつも似た場面はありますが、ウエストサイド物語の「クール」という曲のダンスと、マイケルの「Bad(本当にカッコいいのは?)」のダンスはそっくりです。

人種差別のアメリカの傷は、アメリカの芸術の中に、深く、静かに描かれています。

人々が自由と博愛を求めて、憎しみを超えてつながろうとする音楽や映画は、アメリカの現実を訴えながら、世界中の人々を感動させてきました。

その中には、必ずアフリカから来たリズム感やダンス、自由を求める叫び・・・など、多くのものが影響し重なり合って、人々の心を動かしています。

私たちが、いつもなじんでいるアメリカ(音楽や映画など)の芸術もそうした背景があって、つくられたものなのです。



私たちが、アメリカの文化に、自由さや個性を感じるのは、厳しい人種差別の中で、黒人がずっと求めてきたからこそ、生まれたものなのでしょう。

## 6 人々の勇気が、公民権運動を育てた。

まだ、南部の黒人の人々が、人種隔離政策に苦しんでいたころ、その差別に抵抗する人々が生まれ始めました。



きっかけは、ローザ・パークスという女性です。この黒人女性は、市のバスに乗っていた時、白人運転手から「白人が乗ってきたから、その座席をあけて、後部の黒人の座席に移るように、・・・」注意されました。あなただったらどうしますか？

この当時、このアラバマ州では、人種隔離政策でバスの座席も、半分より前が白人の席、後ろ半分が黒人の席になっていました。黒人の席が満杯で白人の席が空いている場合は座ってもいいことになっていましたが、白人が乗り込んできたら、席を立つように決められていました。

ローザは、白人の席に座っていて、混んできたために立つことを運転手から言われたのです。

さて、この後、ローザはどうなったでしょう。そして、そのあと、黒人たちは、どういう行動に出たでしょう。



運転手に言われてもローザは立ちませんでした。席を移動しなかった理由で警察は彼女を逮捕したのです。仲間の黒人たちは、バスのボイコット運動を始めました。このボイコット運動は、1年以上続き、最後にはアメリカの最高の裁判所である連邦裁判所が「バスの人種分離の市の条例は憲法違反である」という結論を出しました。

このバスボイコット運動のリーダーを務めたのが、マーチン・ルーサー・キング牧師でしたが、当時の運動について、こう述べています。

「教会に集まる人々の表情を見て、あきらめや疲れに毎日おおわれているのが、一番の問題に思えた。希望や誇りが、その表情からは読み取れなかった。しかし、ボイコット運動を始めると、彼らの表情が変わるのが、一日一日、見ていてわかった。お年寄りであろうが、バスに乗らずに、懸命に歩いていた。みな、仕事帰りで疲れているはずなのに、表情は生き生きしていた」

これをきっかけにマーチン・ルーサー・キングは、人種差別撤廃の法律を求め、ワシントン大行進も計画します。

ここでキング牧師がした演説が、有名な内容でした。そして、公民権法という法律が成立したのでした。



法律がどう変わってきたのか。もう一度確認してみましょう。

アメリカ独立宣言 1776年…ワシントン大統領

我らは、以下の諸事実を自明なものとみなす。  
すべての人間は平等に作られている。

奴隷解放宣言 1863年……リンカーン大統領

第9節

すべての奴隷たちは、連邦が得た戦争の捕虜とみなされ、永遠に奴隷の身から解放され、以後再び、奴隷となることはない





アメリカ合衆国憲法 修正第 13 条 1865 年……リンカーン大統領

第一節 奴隷制もしくは自発的でない隷属は、アメリカ合衆国内及びその法が及ぶいかなる場所でも存在してはならない。

公民権法 1964 年……ケネディ大統領

201 章 すべての人は、公共で受ける商品・サービス・施設・特権・利益・設備を、人種・皮膚の色・宗教・あるいは出身国を理由とする差別や分離をなされることなく、完全かつ平等に享受する権利を持たなければならない。

そして、キング牧師の演説です。 1863 年

「私には夢がある。

ある日、ジョージアのレッドヒルの上で、以前の奴隷の息子たちと以前の奴隷所有者の息子たちが、兄弟愛のテーブルにともにつきうることを。

私には夢がある。

ある日、不正と抑圧の熱で苦しんでいる不毛の州、ミシシッピーでさえ、自由と正義のオアシスに変わることを。

私には夢がある。

私の 4 人の子ども達がある日、」肌の色ではなく人物の内容によって判断される国に住むことを。」

しかし、この公民権運動の盛り上がりの中で、たくさんの運動家たちが暗殺されたのも事実でした。キング牧師、マルコム X、そして、ケネディ大統領もこの時期に暗殺されたのです。

人種差別は、現在でもアメリカ社会の重要な克服すべき問題と考えられています。勇気をもって発言することが、アメリカでは大切なことです。

偏見に長年苦しんだ(顔を白くさせているという疑惑、実は病気だった…)マイケル・ジャクソンも、だからこそ、次のような歌を書いています。

その一部を紹介しましょう。

歌詞の中で、シーツに触れているのは KKK を指していると思われます。

**Black or White 1991**

土曜の騒ぎに 彼女を連れていったのさ  
あの娘とかって? そうさ 僕らは何ひとつ変わらない  
僕は 奇跡を信じる そして今夜 奇跡が起こったんだ  
君が僕の恋人のことを考えてるんなら  
白か黒かなんてことは 関係ないのさ

僕は平等について話した

君が間違っているように 正しかろうが 真実さ

君が僕の恋人のことを考えてるんなら

白か黒かなんてことは 関係ないのさ

お前の兄貴なんかこわくない シーツなんか怖くない

僕は誰も怖れない

どんなにみじめになっても

俺は 生涯有色人種と 呼ばれて生きる気はない

僕と同じ意見だなんて 言わないでくれ

君は僕の顔に 泥を塗ったんだから

君が僕の恋人のことを考えてるんなら

白か黒かなんてことは関係ないのさ

ああ 白と黒を乗り越えるのは難しい



\*プロモーションビデオの最後の一瞬で変わるモーフィングの映像が現れる。顔が一瞬にして変わる映像。

言葉よりも雄弁に語る。人種などそんなに違いはない。みな同じではないか。

中学生たちは目を奪われ、この強烈なメッセージと素晴らしい技術に感嘆した。

私自身が学生の時、アメリカではフェミニズム運動とともに、ブラックイズビューティフルの言葉を掲げ、モデルの人々の活躍、スポーツ選手の活躍、黒人の人々の、誇りに訴える活動が広まっていました。

そうした活動は、私にも大きな影響を与え、自分に誇りを持つということが、一番大切なことなのだと教えられました。

## 7 日本には人種差別がない？だから大丈夫？

アメリカは移民の国であり、多人種多民族国家だからこそその苦しみを持っていました。それを乗り越えようとするからこそ、文化もより深く、豊かなものになり、世界中の人々を今も引きつけてやみません。

では、日本はそれほど、差別はひどくなかったのか？

人々はいつも幸せに暮らしてきたのか？

昔のことではなくても、日本は問題を大きくしてこなかっただけに、考えずに済ませている部分がありそうです。

100年前などではなく、アメリカでリンチが起きていたころには、日本も植民地の人々を差別し、誇りを認めるような政治をしてきていませんでした。

よく調べれば、アメリカと同じようなことが、日本が戦争で得た植民地で、あるいは日本国内で、起きた記録が残されています。

そして、民族も一つではなく、アイヌの人々の存在も忘れてはなりません。

歌やスローガンで「一人一人、みんな違って、みんないい」「それぞれ一つの花を咲かせている」そう、よく言われていますが、

本当に私たちは、違いを認め合っているのでしょうか。

日本に住んでいる人々は、一つの人種、一つの民族だけではありません。

人口が減っていけば、当然、近い将来、人手不足で、外国からたくさんの人々が働くためにやってくることも、増えることでしょう。

そんな時に、アメリカの奴隷制という最も過酷な時代を生き抜いた人々、差別された人々、そして差別と闘った人々のことを知ることが、きっと私たちを謙虚にさせてくれて、希望や勇気も育ててくれることになるかと信じています。



## 奴隷貿易と人権の授業

### ねらい

- ① 奴隷制度・奴隷貿易は、必要性から 300 年も続いた。
- ② 奴隷制度・奴隷貿易は、非人道的、残酷な制度である。
- ③ 差別する側、差別される側にその後も大きな傷を残し、社会がゆがむ。
- ④ 人種差別の苦悩から、すばらしい深い文化も生まれる。
- ⑤ 連帯した中から、人種差別撤廃の権利を勝ち取ることができた。

### 授業の構成・・・難しかったり、時間がなかったら 1、2、3、5

- 1 二枚の写真を比べる。奴隷の状況を写真からつかむ。
- 2 なぜ奴隷制が必要だったか、300 年も続いたのか。  
⇒ ・奴隷制、人身売買は世界中に存在していた。  
・しかし工業が発達したから原料の綿花を栽培する労働力が必要。
- 3 奴隷船の実態や、奴隷市場、農園での動物のような扱いを知る。
- 4 奴隷制の廃止で社会は好転しない。  
⇒ 生産工程がそのままなら社会構造も残り、  
人々の意識は変わらない。さらに激化する場合も・・・。
- 5 苦悩の中から生まれる文化  
⇒ 黒人音楽、ジャズ、ダンス、ミュージカル
- 6 抵抗した運動が変えていったもの  
⇒ 公民権運動の到達点
- 7 日本はどうかのдар？